

15. 罪の告白

ペテロの手紙#15

<https://ichthys.com/Pet15.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

霊的成長の復習：これまでの学びで見てきたように、信仰者の霊的成長のプロセスは段階的なものです。そして、それぞれの段階が最大限の効果を上げるためには、次の4つの歩みが必要です。

- ・ 神のことばを求める(聞く段階)
- ・ 神の真理を信じる(信じる段階)
- ・ その真理に従って生きる(生きる段階)
- ・ 自らに与えられた霊的賜物を用いて、他の人々も同じように導く(助ける段階)

これまでの学びでは、まず第一の段階である「聞く」について取り上げました。ここでは、霊的成長の出発点として、みことばの真理を探し求めることが大切であると学びました。続いて第二の段階、「信じる」を学びました。これは、聞いた真理のことばを信仰によって心の中にしっかりと根づかせることを意味しています。

次の段階として、霊的成長の過程における第三と第四のステップ——すなわち「生きること」と「助けること」——を取り上げます。

これまで学んできたように、私たちは知ったことを実際に生きるべきです。そして、神の恵みによって霊的成長の道を歩んできた私たちは、同じ目標を追い求めている他の人々を助けるべきです。私たちが受け取った真理は、心の中に眠らせておくものではありません。むしろ、その真理によって力づけられ、動かされるべきです。学び、信じたみことばの真理を用いて、自分の生き方、思い、人格を形づくり、また同じように他の人々が成長していけるように助けていきましょう。

命の糧を保つこと：何よりもまず、良いクリスチャンとして生き、神が望まれるかたちで仕えるためには、「神を知ることによって成長していく」([コロサイ 1 章 10 節](#))というこれまでの歩みのパターンを保ち続けることが必要です。神のことばは私たちにとって霊的な食べ物です。ですから、それをおろそかにすることは、肉体の食事を抜くことが体に悪影響を与えるのと同じように、心に深刻な害をもたらします([第一ペテロ 2 章 2 節](#)；[第一コリント 3 章 2 節](#)；[ヘブル 5 章 12-14 節](#)参照)。

みことばを生きること：神のことばを「聞く」だけでは十分ではありません。それを「信じる」ことで初めて、私たちに益をもたらします。そして、もし本当に神のことばを信じているなら、それは必ず私たちの思いや行動、そして生き方そのものに強い影響を与えるはずです。イエスはこう言われました「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう」([マタイ 7 章 24 節](#))。また、ヤコブも同じ思いでこう書いています「御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけない」([ヤコブ 1 章 22 節](#))。これらの聖句はいずれも、「聞く」ことから「行う(すなわち生きる)」ことへと直結しています。もし私たちが神のことばの真理を信じ、その信仰が本物であるなら、当然その信仰は行動として現れるはずです。ヤコブが「清く汚れない信心」と呼ぶものとは、まさに自分の信じていることに従って実際に生きることなのです([ヤコブ 1 章 27 節](#))。

霊的なフィットネス： ちょうど、体を健康に保つためには適切な栄養に加えて十分な運動が必要であるように、神のことばをただ聞いて「信じている」と言うだけでは、霊的に健やかに成長することはできません。私たちが聖書から得た知識を日々の生活の中で実際に生かしていくこと——これこそが、信仰の筋肉を鍛える「霊的なトレーニング」なのです。私たちが信じている真理に従って生きるとは、信仰を強め、神が望まれる人間へと私たちを変えていくための欠かせない霊的な運動です。パウロも「信心<新改訳IV:敬虔>のために自分を訓練しなさい」と勧めています([第一テモテ 4 章 7-8 節](#))。信仰を実践する習慣を身につけなければ、私たちが目指す敬虔さ(godliness)に到達することはできません。そうしなければ、霊的に弱まり、信仰生活そのものに悪影響を及ぼす危険があるのです。

競争を走る：[第一コリント 9 章 24-27 節](#)で、パウロは信仰生活を「競走(レース)」にたとえています(参照:[使徒行伝 20 章 24 節](#); [ガラテヤ 2 章 2 節](#), [5 章 7 節](#); [ペリピ 3 章 12-16 節](#); [コロサイ 2 章 18 節](#); [第二テモテ 2 章 5 節](#), [4 章 7-8 節](#); [ヘブル 12 章 1 節](#), [12 章 12-13 節](#); [第二ヨハネ 1 章 9 節](#))。彼はこう勧めています——「勝つために走りなさい！」と。私たちが望むと望まざるとにかかわらず、すべてのクリスチャンはこの地上の人生という「レース」に参加しています。そしてこのレースに「勝つ」ためには、古代の競技者たちが勝利の冠を得るためにそうしたように、「あらゆることについて自制する<新改訳III>」ことが求められます([第一コリント 9 章 25 節](#))。信仰の道は、ただ走るだけの競走ではありません。忍耐と自己訓練、そして神への信頼によって、一步一步進んでいく霊的なマラソンです。

これはつまり、神が与えてくださった人生において「勝利」を得るためには、私たちが常に行わなければならないことがあり、また一方で、決して行ってはならないこともあるということです。多くの競技がそうであるように、クリスチャンとしての人生を生きるうえでも、「攻め」と「守り」の両方が必要です。攻撃(積極的な行動)だけでなく、防御(罪から自分を守ること)も同じくらい大切なのです。ですから、霊的成長に必要な前向きな要素や実践について学ぶ前に、まず「個人的な罪」という問題と、それにどのように対処すべきかを考える必要があります。

罪の問題：まず最初に理解しなければならないのは、たとえ私たちの心の中で本物の変化が起こっていたとしても、この地上の生涯において「罪のない完全な人間」になることは決してないということです。主イエスだけが、人生のあらゆる誘惑に直面しても、ただの一度も罪を犯すことがありませんでした([ヘブル 4 章 15 節](#))。しかし、私たちは皆、その完全さには達することができません([ローマ 3 章 23 節](#))。その理由は、私たちの肉体そのものが堕落したものであり、「罪が宿っている」存在だからです([ローマ 7 章 20 節](#), [創世記 6 章 5 節](#), [8 章 21 節](#))。ですから、自分に都合よく「罪の定義」を変えてしまうような過ちを犯してはなりません。罪とは、私たちが個人的に「悪い」と感じるのではなく、神が禁じられたすべてのことを指します。神が定められた基準に、私たちは何も付け加えることも、取り除くこともできません。神にとって、どんな罪であっても、それはご自身に対する侮辱です。なぜなら、すべての罪は本質的に「神の御心への不従順」だからです。アダムとエバがエデンの園を追放されたのも、「善悪の知識の木の実」を食べたという、一見それほど悪く思えない行為によってでした([創世記 2 章 16-17 節](#))。けれども、それは明確で意図的な神への反逆でした。神が禁じられたことは、私たちの目には「それほど悪くない」ように見えることであったとしても、神の前では深刻な罪であるのです。

罪のない完全さという幻想：「わたしが聖であるように、あなたがたも聖でありなさい」([第一ペテロ 1 章 15-16 節](#))という命令は、私たちが守るべき大切な基準です。また、「霊的に成長し、成熟していくこと」([ヘブル 5 章 11-14 節](#))は、私たちが目指すべき目標でもあります。けれども、この堕落した身体と堕落した世に生きている限り、絶対的な意味での「罪のない完全な状態」は到達不可能です。「罪なき完全(sinless perfection)」という考えは誤った教えであり、しかも非常に危険です。なぜなら、その教えを信じる人々の心に、過度の心理的重圧を生じさせるからです。罪が避けられないという現実の中で、この考えにとらわれた人々は、ある種の罪を「本当の罪ではない」と否定したり、自分はその罪を犯していないと言い張ったりするようになります。しかし、罪の根は非常に深く、また巧妙です。罪は人間の行動だけでなく、心の動機や思いの

中にまで及んでいます([エレミヤ 17 章 9 節](#); [ガラテヤ 5 章 19-21 節](#); [エペソ 4 章 29-31 節](#); [ピリピ 2 章 3-8 節](#))。どんなに高い道徳的基準を自分に課しても、私たちは必ずどこかで失敗します([ローマ 9 章 31 節](#), [10 章 3 節](#)参照)。神が定められた最も具体的な行動規範である十戒の最後には、「欲してはならない」([出エジプト記 20 章 17 節](#))という戒めがあります。これは、偶像礼拝や殺人と同じように、心の中の貪りや欲望も罪であることを示しています([ローマ 7 章 7-12 節](#))。実際、パウロは、神が律法をお与えになった目的は、すべての人に自らの罪深さをはっきりと認識させ、神の救いの手段であるイエス・キリストを必要としていることを悟らせるためであったと述べています([ローマ 3 章 9-20 節](#); [ガラテヤ 3 章 19-25 節](#))。パウロの時代にも、多くの「宗教的な人々」が、モーセの律法を自分の正しさの証明に使うとしました。しかし、その結果、彼らはかえって自分自身を罪に定めることになったのです([ローマ 3 章 20 節](#))。本当の義とは、自分の努力で得るものではなく、神がその御子イエス・キリストを信じる者に与えてくださる義です([ローマ 4 章 5 節](#))。私たちは、悪魔が支配する敵対的な世界の中で生きるキリストの弟子です。だからこそ、自分の弱さ、過ち、罪に対して幻想を抱くことなく、正直に認めなければなりません。そして、それらに対処するために、神が恵みによって備えてくださった方法を、ただちに用いることが大切なのです。

罪からのきよめ： 信仰によってキリストの御業を受け入れたとき、私たちはすでに「洗われた者」とされ、罪から赦され、きよい者と宣言されました([エペソ 2 章 5-9 節](#))。「キリストにある者」として私たちはきよめられています([第一コリント 6 章 11 節](#))、それでもこの悪しき世の中を歩むうちに、足に少しの汚れがつくことがあります。神は私たちを「聖なる民」としてくださっていますが、私たちは依然として不完全であり、罪を犯す可能性のある存在なのです。ですから、この地上にいる限り、私たちは常に個人的な罪に陥る危険があることを覚え、罪に対して「容易にからみつくもの」([ヘブル 12 章 1 節](#))として警戒し、罪を犯したときにはすぐに告白してゆるしを受ける準備が必要です。このことを教えるために、主イエスは最後の晩餐の前に弟子たちの足を洗われました([ヨハネ 13 章 1-17 節](#))。ペテロは最初、この行為を拒みましたが、主が「もしわたしがあなたの足を洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もなくなる」と言われると、逆に全身を洗ってほしいと願いました。そのとき、イエスはこう答えられました。「身体を洗った者は、足だけ洗えばよい。全身はすでにきよいのだから」([ヨハネ 13 章 10 節](#))。イエスはここで、すべての人類を罪の束縛から解放するための「一度限りのきよめ」、すなわちご自身の死による贖いの業について語られたのです([コロサイ 2 章 13-14 節](#))。これは、信仰によってすでに成し遂げられ、二度と繰り返す必要のない「全身の洗い」です。しかし、信者であっても日々の生活の中で個々の罪を犯すことがあります。そのとき私たちは「足を洗う」必要があります。つまり、罪を告白し、神の赦しと回復を受けるの

です。罪からの洗いは一度だけで十分です。しかし、私たちが罪を犯すたびに、その罪からのきよめを求め続けなければならないのです。

ヨハネの罪に関する基本教理：ここまで述べてきたように、罪はきわめて個人的であり、また深く心をかき乱す問題です。使徒ヨハネは、民族的にも地理的にも多様な信徒たちで構成され、すでに長年にわたり使徒的な教えを受けてきた教会に宛てた手紙(第一ヨハネ)において、この罪の問題をあらためて詳しく取り上げています。彼は第一章 5～10 節で、罪の教理を簡潔かつ的確にまとめています：

第一ヨハネ 1 章 5 節：わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。

この節は、神が罪とは何の関わりも持たないことを明確に宣言しています。神は罪の起源ではなく、罪に対していかなる責任も負っておられません。また、罪を少しも容認されません。罪は神にとってまったく異質なものであり、神の本性に反するものです。したがって、もし私たちが本当に神に属する者であるなら、罪は私たちのうちにも居場所をもつことはできません。

第一ヨハネ 1 章 6 節：神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。

神と罪とは、決して相いれません。ですから、私たちはどちらに従うのかを選ばなければなりません。罪という暗闇の道を歩みながら、同時に神との交わりを保つことはできないのです。もし私たちが、罪の力のもとに生きながら「神と交わっている」と主張するなら、それは自分を欺くことになり、神を偽り者とすることになります。なぜなら、神ご自身が、罪あるものを受け入れることはできないと語っておられるからです。

神の恵みとあわれみの力がなければ、この二つの節(第一ヨハネ 1 章 5 節 6 節)は、正直に自分の罪深さを見つめる人にとって、恐ろしい宣告に聞こえるでしょう。弟子たちが主に語った「では、だれが救われることができるのだろう」([マタイ 19 章 25 節](#))という言葉が思い起こされます。

第一ヨハネ 1 章 7 節: しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、**すべての罪**からわたしたちをきよめるのである。

ギリシア語の πᾶς (pas)「すべての」という語が定冠詞を伴わずに用いられていることから、ヨハネはここで個々の罪、つまり**あらゆる**個人的な罪の行為を指していると考えられます。この世で神を拒む者には、罪からの逃れ道はなく、したがって神の聖なる民との交わりありません。しかし、光の中を歩み、キリストに従うことを選んだ者には、あらゆる罪からきよめられる手段が備えられています——それが、御子イエス・キリストの十字架のわざです(聖書ではしばしば「その血」と呼ばれます。[マタイ 26 章 28 節](#)参照)。イエス・キリストが私たちの代わりに死んでくださったことによって、父なる神はそのわざを私たちのためのものとして受け入れ、すべての罪を赦し、地上の体に宿る罪深い性質を持ちながらも、また罪を犯し続ける私たちを清い者と見なしてくださるのです。このたとえにおいて、罪によって汚れた私たちを覆うものとして、父なる神は「キリストの血」によって「注がれた」私たちを見ておられます([ヘブル 10 章 22 節](#)参照)。神は、罪の罰がすでに私たちのために支払われたことに満足しておられます。そして、私たちを御子との関係のゆえに義と見なし、罪に汚れた行いによってではなく、その恵みによって受け入れてくださるのです。しかし [7 節](#)に注意すべきことがあります。すなわち、正しい信仰生活を歩んでいる信者——「光の中を歩む者」——であっても、キリスト者として歩む中でもなお、罪からのきよめを必要としているのです。

第一ヨハネ 1 章 8 節: もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない。

第 8 節は、自分を「罪のない者」だと思いたい信者に向けた重要な警告です。もし最近、自分には罪がないと思うなら、それはおそらく、罪の広がりや根深さを正しく理解していないからです。聖書はここで、きわめて明確に語っています——信者であっても、なお罪を犯すのです。確かに、私たちは罪を犯してはならないと命じられています。また、罪を抑えることは、霊的成長や霊的安全のためにも欠かせません。しかし同時に、私たちはこの不完全な肉体に住み、悪しき者の支配する世に生きている限り、個人的な罪との戦いを続けなければならないのです。聖書は、私たちが「血を流すまで罪と戦う」([ヘブル 12 章 4 節](#); [第一ペテロ 4 章 1 節](#)参照)ようにと語っています。第 8 節は、私たちに罪への抵抗をあきらめさせたり、罪を容認したりするために書かれたものではありません。むしろ、私たちが今置かれている現実——罪との厳しい戦いのただ中に生きているという事実——を直視させ、個人的な罪に対して正しい、聖書的な方法で対処する必要を思い起こさせるために記されているのです。すなわち、その

方法とは「罪を告白すること」です。

第一ヨハネ 1 章 9 節: もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。

第 9 節は、神が私たちの個々の罪を赦して下さることが、神ご自身の真実(約束を破られないこと)と義(キリストが私たちのためにすでに罪の代価を支払ってくださったこと)とに基づいていることを意味しています。私たちが自分の罪を父なる神に祈りの中で告白するとき、神はその約束に従って、私たちを赦し、再びご自身と御子との完全な交わりの中へと回復して下さるのです。

第一ヨハネ 1 章 10 節: もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない。

罪の告白は、クリスチャンの日々の歩みにおいて欠かせないものです。日ごとの自己吟味と組み合わせることで、聖書的に正しい罪の理解を持つ人なら、告白すべきことはいくらでも見つかるはずです。自分には罪がないと主張することは誤りであり、そのような考え方は、クリスチャンの霊的な健全さにとって非常に危険なものです。(第一コリント 11 章 28-32 節)。

罪の告白： 信者である私たちは、「キリストとの関係」という観点から見たときにのみ、罪から完全にきよめられています。私たちはキリストにある者としての立場(ポジション)によって、神は私たちの過去・現在・未来のすべての罪を完全に洗い清められたものとして見てくださいます。いわば、「内側はきよめられている」のです。しかし、私たちの日々の生活の中では、しばしば「外側が汚れてしまう」ことがあります。過ちを犯したとしても、それによってクリスチャンでなくなるわけではありません。私たちは依然としてキリストに結ばれており、その限りにおいて神は私たちをきよい者として見ておられるのです。罪を犯したとき、再び「救いのための大きな洗い清め」を受ける必要はありません。必要なのはただ、「足を洗うこと」——すなわち、日々犯す個々の罪からのきよめです。

告白(罪の告白)は、私たちがこの絶えず続く罪の問題に対して神から与えられた唯一の解決策です。キリストの御業が、私たちが彼を信じた瞬間にすべての罪の束縛から解放するのに十分であったように(洗礼という儀式がその象徴です)、その同じキリス

トの御業は、私たちが救われた後に罪を犯すたびに、私たちをきよめるのに十分なのです。

ダビデの偉大な悔い改めの詩篇である詩篇 32 篇は、私たちが罪を告白する際に心に留めるべき二つの重要な原則を、非常に明確に示しています。ひとつは、自分の過ちを正直に認めることです。罪は重大なものであり、その結果もまた深刻です。ですから、神の赦しを求めるときには、心から悔いるへりくだった態度で神のもとに進み出なければなりません。もうひとつは、同時に、神がすぐに、無条件に赦してくださることを確信して近づくことです。神の赦しは、私たちの功績によるものではなく、御子イエス・キリストの御業によるものだからです。このように、キリストの真理を実生活に適用する際には、私たちはどちらの極端にも陥らないように注意しなければなりません。自分の罪の重大さを軽く扱うこともできませんし、またその反対に、過度の罪悪感や不安に押しつぶされて、神の完全で愛に満ちた赦しを疑うこともできません。

ダビデの経験は、この二つの原則を非常に明確に示しています。彼は、自分の罪を神の前に隠そうとしたとき、神の厳しい懲らしめを受けました(詩篇 32 篇 3-4 節)。しかし、彼がその罪を「告白し、隠すことをやめ、神の前に打ち明けた」とき、神は彼を赦されました(5 節)。ここで語られている「告白」「隠さない」「認める」という三つの行為は、罪の告白の別々の段階ではなく、自分の罪を認めて神に打ち明けるというひとつの行為の異なる側面を表しています。つまり、私たちは祈りの中で自分の罪を神に正直に言い表し、否認することをやめ、真実を認めなければならないのです(6 節参照)。そうするとき、私たちはダビデのように、神が必ず赦してくださることを確信してよいのです(第一ヨハネ 1 章 9 節参照)。箴言 28 章 13 節にもこうあります。「自分の咎を隠す者は栄えない。これを告白して捨てる者はあわれみを受ける。」(詩篇 51 篇も合わせて読むとよいでしょう。)次回は、罪からの回復という「守りの側面」から、霊的生活の「攻めの原則」である「徳のある思考」(virtue thinking)へと進んで学んでいきます。

罪の告白についてさらに学びたい方は、以下のリンクをご参照ください。

- ・ [悔い改め・告白・赦し\(Basics 3B\)](#)
- ・ [第一ヨハネ 1 章 9 節と罪の告白について](#)
- ・ [罪の告白・交わり・聖霊に満たされることについて](#)

[ペテロ #16:「聖霊の導き」に続く